



町にデパートがあるという町

駅前2店のインパクト

函館駅を出て電停に向かうと、交差点の左角にWAKO、右角に棒二森屋が見える。地元市民にとっては当たり前風景だったのかもしれないが、よそ者の私にとっては、実にインパクトのあるものでした。

デパートなんて、どんな町にもあるものではありません。デパートがあるということは、その町が地域の中心地として栄えてきた証です。それが函館では、駅を出るとすぐにつ



WAKOがあって、棒二森屋があって。函館駅前といえば、この風景だったので

も目に飛び込んでくる。しかもどちらも地元のデパートです。ここにかない、というところがいいのです。実名を出すのも何ですが、もしそれが大丸や高島屋、伊勢丹だったら、京都にもあるわけで、旅先でわざわざ入ろうとも思いません。

そこへいくと、よく「棒二森屋」なんて、屋号がそのままデパート名になったようで、伝統を感じさせられます。するとますます中をのぞいてみたくなりますし、「この町は何で発展してきたのだろうか」など、デパートのできた背後にある町の歴史にも興味を湧くというものです。

実際に棒二森屋は、北洋漁業という函館ならではの富の生産装置により栄えた大門とともに、歴史を刻んできたわけです。

デパートの思い出

私と同年代の50代後半の函館の人は、「子どものころ、日曜日に家族で棒二森屋へ行って、屋上遊園地で遊び、食堂でお昼を食べると幸せだった」と言っていました。

世代によってはピンとこないかもしれませんが、今ほど娯楽のなかった高度経済成長期には、家族の休日の舞台といえばデパートでした。

だから私も同じです。親に連れられ大丸に行くのが楽しみでした。

函館の子どもとしての棒二森屋は、関西の子どもだった私にとっては大丸みたいなもの。ただ、店内の様子も違えば、屋上遊園地や食堂のメニューなんかにも違いがあって、同じ「家族の日曜日」でもそれぞれにローカル色があふれていたと思います。

棒二森屋前最後の港まつり

今年は何年かぶりに、港まつりの「ワッショイはこだて」をじっくり見物しました。函館駅前からグリーンプラザにかけて、「いったいどこから人が湧いてくるのだろう」と不思議に思うほどの人出でした。パレード参加者も見物客も、以前より減っているとのことですが、さすがは港まつりです。

ただご存じのように、駅前交差点にWAKOの姿はすでになく、キラリ又函館がそびえています。一方、棒二森屋は健在です。しかしその壁面には、「150年の感謝を込めて。閉店売りつくし」という垂れ幕がかかっています。

店内の貼り紙には、2019年1月31日をもって営業終了、とありま

した。聞くところでは、その後、ほどなく建物の解体工事に入るとか。

棒二森屋の本館は、昭和12年に新築された後、6度も増築され、今に至ります。昭和57年に駅前交差点角のアネックスが増設されました。そういう建物自体が、繁栄の生き証人のようなもの。ちょっと古風な外観や内装にも味わいがあります。

長い歴史に幕が下ろされるといことは、いろいろな事情があるのでしよう。部外者でよそ者の私など、何かを言える立場にはありません。ただ来年から、港まつりの風景も変わることだけは確かかなようです。



港まつり・ワッショイはこだて「子供いか踊り」。棒二森屋前で見えるのもこれが最後

★プロフィール★

おおにし つよし
大西 剛さん

1959年生まれ、大阪出身。
2011年秋より函館に移住し、「新函館ライブラリ」を設立。函館本の出版に取り組む。近ごろはYouTube(チャンネル名「新函館ライブラリ」)でも、コアな函館情報を発信。